

立川市におけるコーホート調査 (小児期からの成人病予防に関する研究)

西田美佐¹⁾、川南勝彦²⁾

1)順天堂大学医学部公衆衛生学教室

2)国立公衆衛生院疫学部

【はじめに】1998(平成10)年度は、昨1997(平成9)年度に引き続き、初回調査(1992/平成4年度;3歳時点)と第1回追跡調査(1996/平成8年度;小学1年生時点)のデータをリンクさせ、初回・第1回追跡調査ともに回答が得られた443名中、両調査時点で身長・体重の照合が可能だった384名を対象に、(1)対象児の小学1年生(以下小1)時点での肥満、軽体重児の割合やその3歳時の体格との関連、(2)肥満、軽体重児の健康の特徴や、ライフスタイル、環境との関連、(3)ライフスタイルの形成過程や成因を検討した。

【調査及び解析方法】初回調査、追跡調査時に保護者を対象に「子どもの健康とライフスタイル」に関する質問紙調査を実施した。また、健診時に計測した身長、体重からBody Mass Index(BMI)〔体重(kg)/身長(m)²〕を算出し、小1時のBMIを3群(軽体重群=14未満、標準体重群=14以上18未満、肥満群=18以上)に分け、ライフスタイルや環境との関連を検討した。ライフスタイルの形成過程については、初回、追跡調査で照合可能な項目の関連を、ライフスタイルの成因については環境との関連をみた。

【結果】(1)小1時点で、肥満群は8.1%、

軽体重群は12.0%であった。3歳時のBMIとは高い相関を示していたが、肥満群は5.7%→8.1%に、軽体重群は2.3%→12.0%に増加していた。(2)軽体重群では子どもの健康度が「とても良い」と回答した者が少なく、肥満群では多かった。軽体重群は、朝食で「ごはん」「みそ汁」を食べる者、夕食を「祖母と」食べる者、睡眠時間が長く、就寝時刻が遅いまたは早い者が多かった。肥満群は、「早食い」の者が多く、朝・夕食を「兄弟姉妹」と食べる者や朝食で「パン」「牛乳」を食べる者が少なかった。(3)小1時のライフスタイルは3歳時のそれと非常に強い相関を示しており、朝食の内容には一緒に食べる人との、休日の間食時間には母親の就業形態や祖母の同居との関連がみられた。

【結論】以上のように、小1時の体重、ライフスタイルとも3歳時のそれと強い相関を示していたが、小1時には軽体重群・肥満群が3歳時よりも増加していることから、小児期からの健康的なライフスタイルの形成の為には、より早い時期からの介入が効果的である可能性が示唆された。その際、同居家族や母親の就労形態など、家庭の状況の違いを配慮した対策を講じる必要があるだろう。また、小1時点で、軽体重児が1割以上存在し、健康上の問題が懸念されることから、今後は肥満と同様、小児の軽体重にも注目して、健康やライフスタイルとの関連を観察していく必要があると考えられた。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【はじめに】1998(平成 10)年度は、昨 1997(平成 9)年度に引き続き、初回調査(1992/平成 4 年度;3 歳時点)と第 1 回追跡調査(1996/平成 8 年度;小学 1 年生時点)のデータをリンクさせ、初回・第 1 回追跡調査ともに回答が得られた 443 名中、両調査時点で身長・体重の照合が可能だった 384 名を対象に、(1)対象児の小学 1 年生(以下小 1)時点での肥満、軽体重児の割合やその 3 歳時の体格との関連、(2)肥満、軽体重児の健康の特徴や、ライフスタイル、環境との関連、(3)ライフスタイルの形成過程や成因を検討した。